

象形文字ルウィ語の小辞-si 再考

大 城 光 正

1. はじめに

印欧アナトリア諸語には他種多様な小辞 (particles) が存在する¹⁾。その様相は同諸語グループに属する象形文字ルウィ語 (Hieroglyphic Luwian) においても例外ではない²⁾。そこで、象形文字ルウィ語の小辞の中でも、特に文末の動詞形に直接付加した-si 要素はなおその機能面において不確定な小辞と見做されている。たとえば、Hawkins は彼の碑文資料集 (2000) で-si 要素を “still unexplained” と記している³⁾。ただし、筆者はすでに 1993 年の拙稿 (pp. 53-54) において、-si 要素を象形文字ルウィ語の再帰表現に関与する小辞の一つと指摘し、最近の Plöchl (2003:67-68) や Payne (2004:25) の考察において一定の評価を得ている。当時、-si 要素の用例は ALEPPO (2) の碑文、KARKAMIŠ (A11b) と KARKAMIŠ (A12) の碑文に各 1 例のわずか 3 例が確認されるのみであったが、最近発見された象形文字ルウィ語碑文 (TELL AHMAR (6) の碑文) において 2 例、ÇINEKÖY 碑文 (カラテペ碑文と同様に、フェニキア語と象形文字ルウィ語の対訳碑文) においてさらに 2 例の-si が確認される。そこで本稿では、従来の 3 例の-si の用例に加えて、さらに確認された 4 例の小辞-si の文脈分析をすることで、象形文字ルウィ語の小辞-si を再考してみたい⁴⁾。

2. 小辞-si の用例⁵⁾

小辞-si の用例は、Hawkins の象形文字ルウィ語碑文資料集 (2000) が公刊された時点においても、拙稿 (1993) の引用による以下のわずか 3 例のみで、追加資料は皆無であった。

(1) ALEPPO 2, 3:

(vii) mu-pa-wa/i-’ URBS-ni-zi-’ NEG₂-’ [.....]

(viii) wa/i-mi-’ (DEUS) SOL-ni-za (“LIGNUS”) ta-ru-sa i-zi-i-ha-si

(ix) a-wa/i mi-na-’ FRATER-la-na ‘ha-mi-ia-ta-nâ NEG₂-’ [.....]-ha

(vii) 「そして、町々が (URBS-ni (n) zi) 私を (mu) [.....] しなかった (NEG)。

(viii) 私は自ら (-mi) 太陽神の (SOL-niza) 像を (tarusa) 作った (iziha-si)。

(ix) 私は私の(min)兄弟の(FRATER-lan)ハミヤタを[.....]しなかった(NEG)。」

上記例における(viii)の動詞形 iziha は動詞 izi-「作る、為す」の1人称単数過去形であり、同語形に後続している-si は動詞の語尾形ではない⁶⁾。むしろ、-si は文末に位置する動詞(象形文字ルウィ語の基本的語順では動詞は文末)に付加した再帰性に関与する前接小辞と位置づけられる。(viii)の文では人称代名詞1人称前接形-mi による再帰表現形式が見られるので、小辞-si は再帰性を重複的に強調する効果を担っているものと考えられる。象形文字ルウィ語の再帰代名詞前接形は、1人称単数 -mi、2人称単数 -ti、3人称単数 -ti、1人称複数 -a(n)za、2人称複数 -ma(n)za、3人称複数 -ma(n)za であるが、人称制限に関与しない汎用的な再帰代名詞の単独形(ヒツタイト語-z(a)、楔形文字ルウィ語-ti、リュキア語-ti 等)は象形文字ルウィ語には在証されていないが、その第一候補として小辞-si が挙げられるであろう⁷⁾。この象形文字ルウィ語の小辞-si の対応形としては、パラ語(Palaic)に散見される再帰代名詞前接形-si が推知される⁸⁾。

なお、パラ語には-si の再帰小辞とともに、楔形文字ルウィ語-ti に対応する再帰小辞-ti も存在する。

パラ語 : KUB XXXII 18:

(vi-vii) a-an-ti-en-ta ma-a-ar-ha-as a-ta-a-an-ti ni-ip-pa-si
mu-sa-a-an-ti

(vi-vii) 「そして(a-)神々は(marhas)自ら(-ti)それを(-an)食べる(atanti)が、彼ら自身(-si)は決して満足しない(ni-musanti)。」⁹⁾

(2) KARKAMIŠ A11b, 3:

(vii) a-wa/i REL-a-ti-i (ANNUS)u-si-i ka-wa/i-za-na(URBS)
(CURRUS)wa/i+ra/i-za-ni-ná PES₂-za-ha

(viii) pa-tá-za-pa-wa/i-ta-' (TERRA+LA+LA)wa/i-li-li-tá-za mi-i-zi-'
tá-ti-i-zi AVUS-hu-ti-zi-ha *384(-)la/i/u-tá-li-zi-ha NEG₂-'
(PES₂)HWI-HWI-sá-tá-si

(vii) 「私がカワの町の戦車を(warzanin)運んだ(PES-zaha)その年に(usi)、

(viii) それらの(apata(n)za)戦地では(walilita(n)za)私の(mi(n)zi)父も(tati(n)zi)祖父も(AVUS-huti(n)zi)先祖も(*384-latali(n)zi)自ら(-si)行軍しなかった(NEG-hwihwisa(n)ta)。」

(3) KARKAMIŠ A12, 2:

(ii) [.....]-ti-zi-ha NEG₂ (PES₂)HWI-HWI-sá-ta-si

(iii) mu-pa-wa/i-' (DEUS)TONITRUS-sa (DEUS)kar-hu-ha-sa

(DEUS)ku-AVIS-pa-sa-ha PRAE-na PES₂-wa/i-sà-i-ta

(ii) 「[それらの戦地では父も祖父も....]自ら(-si)行軍しなかった
(NEG-hwihwisa(n)ta)。

(iii) しかし(-pawa)、タルフント神、カルフハ神、クババ神は私の(mu)前を(PRAE-n)
進んで行った(PES-wasai(n)ta)。」

上記例(2)と(3)におけるそれぞれの文末の(PES₂)HWI-HWI-sà-ta-siの形は、動詞
(PES₂)HWI-HWI-sa-「進む」の3人称複数過去形(PES₂)hwihwisa(n)ta「彼らは行軍した/
進んで行った」に再帰小辞-siが付与した再帰表現形と考えられる¹⁰⁾。

さらに、以下の用例は最近発見された碑文に散見される小辞-siの用例で、
Hawkins(2000)の碑文資料集に含まれていないものであるが、TELL AHMAR(6)碑文に関して
はHawkinsによる公刊が予定されている¹¹⁾。

(4)TELL AHMAR 6:

(vii) PRAE-pa-wa/i-mu za-a-sa EXERCITUS-la/i/u-na-si-sa

(DEUS)TONITRUS-sa hu-ha-sà-ta-si

(vii) 「この(zas)軍隊の(EXERCITUS-lanasisa)タルフント神(TONITRUS-s)自らが
(-si)私の(-mu)前を(PRAE)HUHASA-(?)した。」¹²⁾

(5)TELL AHMAR 6:

(xvi) za-a-sa-pa-wa/i-mu EXERCITUS-la/i/u-na-si-i-sa (DEUS)TONITRUS-sa
(LITUUS)á-za-ta [pa][?]-sa-[? ?] [.....]-hi-[tà[?]]

VIA[?]-wa/i-sa-la-hi-tà wa/i+ra/i-li(-)tà-ha

(xvii) wa/i-ma-sa-' PRAE-na hu-ha-sà-ta-si

(xvi) 「この(zas)軍隊の(EXERCITUS-lanasisa)タルフント神は(TONITRUS-s)私を
(-mu)寵愛した(aza(n)ta)。そして私は[.....]をWARALI-(?)した。

(xvii) 彼は(-as)自ら(-si)私の(*-mu>-ma)前を(PRAE-n)HUHASA-(?)した。」

上記例のように、TELL AHMAR(6)碑文にみられる小辞-siは、いずれも動詞huha-の反復
相接尾辞-sa-が付加した3人称複数過去形に付加している。同語形は前述のカルケミシュ
碑文(A11b, A12)の3人称複数過去形hwihwisa(n)ta「彼らは行軍した/進んで行った」を推
知させるものである。動詞形huha-は象形文字ルウィ語の初出語彙であるので、その明確
な意味は不明であるが、文脈上は「前方に」という方向性を明示する動詞前綴り(preverb)
のPRAE-na(<*paran: 楔形文字ルウィ語parran、ヒッタイト語piran)を伴って何らかの

方向性を含意する動作を表す動詞で、この箇所は、“タルフント神自らが(!)援軍に来てくれた”という再帰的なニュアンスを表出していると考えられる。それゆえ、TELL AHMAR(6) 碑文の上記2例の小辞形-si は先述の用例(2)と(3)と同様の文脈表現における再帰表現と首肯される。

さらに、ÇINEKÖY 碑文に2例(vi, vii)の小辞-si が確認される¹³⁾。

(6)ÇINEKÖY:

(vi)REL-pa-wa/i-mu-u su+ra/i-wa/i-ni-sa(URBS) REX-ti-sa
 su+ra/i-wa/i-za-ha(URBS) DOMUS-na-za ta-ni-ma-za tá-ti-na MATER-na-ha
 i-zi-ia-si

(vii)hi-ia-wa/i-sa-ha-wa/i(URBS) su+ra/i-ia-sa-ha(URBS) “UNUS” -za
 DOMUS-na-za i-zi-ia-si

(vi)「そこで、スラワの王(REX-tis)とスラワのすべての(tanimaza)領地が
 (DOMUS-naza)私のために(-mu)父(tatin)と(-ha)母を(MATER-n)IZIYA-SI(?)。

(vii)「ヒヤワの町とスラヤの町が一つの領地に(DOMUS-naza)IZIYA-SI(?)。」

上記例文における(vi)の主語は、「スラワの王(surawanis REX-tis)とスラワのすべての領地(surawaza tanimaza DOMUS-naza)」、(vii)の主語は「ヒヤワの町(hiyawas)とスラヤの町(surayas)」であり、両方とも3人称複数形である。このことは同碑文のフェニキア語対訳碑文のフェニキア語文からも確認される¹⁴⁾。それゆえ、両文の文末要素 iziyasi は iziya-「作る、為す」の動詞形成要素と小辞-si に分析可能である: iziyasi < *iziya + *-si。そこで、文脈上、前方要素 iziya に3人称複数過去形を措定しなければならないので、同形は3人称複数過去形 *iziyanta の表出形と推定しなければならない。つまり、その形成過程は、注5)の指摘のように、複数語尾-anta の子音-t-直前の-n-は表記されないので、文字表記上は *iziyata となるべきであるが、さらに、この動詞語尾末尾の-ta が碑文書記の誤謬によって脱落したものと推察される: *iziyanta > *iziyata > *iziya。なお、このような動詞語尾形の一部の音節文字表記の脱落はこの碑文に限らず、決して珍しいものでもない¹⁵⁾。

そこで、筆者の上記(vi) (vii)の tentative な解釈としては、「そこで、スラワの王とスラワの全領地が自ら(-si)私のために父と母を作ってくれた。そして、ヒヤワの町とスラヤの町が自ら(-si)一つの領地になった。」

しかしながら、最近の Rieken(2004)の解釈では、上記碑文における-si 要素を印欧祖語の再帰代名詞形 *-si からの継承形とみなしている。その論述では、筆者の再帰小辞-si としての機能上の原初的な意味については認知しているが、さらに同要素を象形文字ルウィ

語における新たな中受動態人称語尾形成の改新形、つまり、上述の7例の在証である ALEPPO 碑文の izihasi の -hasi を中受動態1人称単数過去形語尾、ÇINEKÖY 碑文の2例の iziyasi の -asi を中受動態3人称単数過去形語尾、及び、TELL AHMAR 碑文の2例の huhasatasi の -tasi もヒタイト語の -ari/-tari 語尾に対応する中受動態3人称単数過去形語尾、KARKAMIŞ (A11/12) 碑文の hwihwisa (n)tasi の -a(n)tasi を中受動態3人称複数過去形語尾とみなしている。しかし、すでに注(6)で指摘しているように、同語尾形の形成には他の印欧アナトリア諸言語、特にルウィ諸言語間（楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語）の中受動態語尾形の詳細な比較言語学的考察が必要であるが、現在までに確認されている象形文字ルウィ語中受動態語尾形としては、3人称単数現在 -ari、3人称単数命令 -aru、3人称複数命令 -a(n)taru のみであり、彼女の語尾再建についてはなお不確実と言わざるを得ない¹⁶⁾。

3. 文末位置の小辞 -si

そこで、象形文字ルウィ語の再帰小辞 -si が文末の動詞に付加する構文の妥当性については、上記例に限定される例外的な構文かどうかの検証が必要となる。象形文字ルウィ語に限らず、アナトリア諸言語に見られる小辞類は、大抵、文導入辞に始まり、文小辞に終わる規則的な連結体系を示している。つまり、強制的に文頭に置かれる名詞や代名詞等が存在しない場合の一般的な語順は、文導入辞(a-) + 接続小辞(-pa) + 引用小辞(-wa-) + 前接的人称代名詞与格・対格(-mu, -tu, -a(n)za, -ma(n)za) + 再帰小辞(-mi, -ti, -a(n)za, -ma(n)za) + 文小辞(-ta)となる。たとえば、下記の用例(7)と(8)における3人称単数の主語文における再帰小辞 -ti の例などはその典型である：

(7) KARKAMIŞ A23 5:

wa/i-ti-' pa-sa-' tá-ti-ia DOMUS-ni BONUS-ia-ta

「彼女(=クババ女神)は自ら(-ti)彼女の((a)pasa)父の(tatiya)家を(DOMUS-ni)崇めた(BONUS-iata)。」

(8) SULTANHAN 5:

wa/i-ti REL-sa za-na DEUS-ni-na REL-sà-i wa/i-ta á-pa-sa-ha
á-pa-sa-za sa-na-wa/i-ia-za za-ri+i a-ta LITUUS. LITUUS-na-i

「この(zan)神を(DEUS-nin)自ら(-ti)恐れる(REL-sai)者(REL-s)、その者(apas)もまた(-ha)彼の(apasaza)善行を(sanawaiyaza)この地で(zari)目にする(LITUUS. LITUUS-nai)。」

また、上記のような小辞の基本的な語順位置に生起する用例以外に、僅少例ではあるが、先頭の動詞要素に付加する小辞群の用例も以下の碑文等に散見される：

MEHARDE (ii): i-zi-i-ta-pa-wa/i-tu (動詞 izita+文導入辞-pawa+人称代名詞 3 人称単数与格前接形-tu)

KULULU 2 (vi): “SA₄” -sa-ni-ti-pa-wa/i-mu (動詞 SA₄-saniti+文導入辞-pawa+人称代名詞 1 人称単数与格前接形-mu)

TOPADA (x): PONERE-wa/i-ta-pa-wa/i-ta (動詞 PONERE-wata+文導入辞-pawa+人称代名詞中性 3 人称単数対格前接形-ata)

SULTANHAN (xii): ta-nu-wa/i-ha-wa/i-na (動詞 tanuwaha+文導入辞-wa+人称代名詞 3 人称単数対格前接形-(a)n)、等。

しかしながら、象形文字ルウィ語の碑文の中で、上記例のように-pawa, -wa のような接続小辞(connective particles)の表出もなく、文末の動詞形に直接付加する小辞の用例は上記例(1)~(6)の-si 以外、現在のところ皆無であり、小辞-si の生起例が象形文字ルウィ語資料に限定すれば特異な例であることも明らかである。

なお、象形文字ルウィ語と非常に近い親縁関係にある楔形文字ルウィ語には、動詞に楔形文字ルウィ語の再帰小辞-ti が直接付加した例が見られる：

KUB XXXII 9 Rs. 16: i-li-il-ha-i-ti 「彼は自ら洗い流す」

KUB XXVII 26 6: il-ha-ti-ti 「彼は自ら洗う」

つまり、KUB XXXII の用例は、動詞 ililha-「洗い流す」の 3 人称単数現在形 ililhai(hi-活用動詞)に再帰小辞-ti が付加した形、KUB XXVII の用例は、動詞 ilha-「洗う」の 3 人称単数現在形 ilhati(mi-活用動詞)に再帰小辞-ti が付加したものと推定される¹⁷⁾。

4. おわりに

象形文字ルウィ語碑文において、小辞-si の例は上記のように僅少であり、また、同小辞の文末動詞形への特異な付加形態にもかかわらず、小辞-si が象形文字ルウィ語の再帰性を表出する再帰小辞(reflexive particle)であることが、最近発見された TELL AHMAR 碑文と ÇINEKÖY 碑文の追加資料からも追認することができた。同小辞はパラ語の再帰小辞-si との照応を示唆するものである。なお、象形文字ルウィ語における人称代名詞前接形の再帰代名詞(-mi, -ti, -a(n)za, -ma(n)za)の再帰表現と小辞-si の再帰表現の共存の形成過程については今後の考察を俟たねばならない。

注

- 1) Carruba (1969) 参照。
- 2) 最近の象形文字ルウィ語の概説書としては、Plöchl (2003) 及び Payne (2004)、拙書 (1990:177-211) 参照。
- 3) Hawkins (2000) の KARKAMIŠ (A11b) 碑文 (p. 105)、及び ALEPPO 碑文 (p. 238) の注釈を参照。
- 4) 新たな小辞形 *-si* が散見される TELL AHMAR (6) 碑文、及び ÇINEKÖY 碑文の翻字と碑文資料提供、及び、意見交換については、Dr. Annick Payne (Würzburg) に深謝の意を表す。
- 5) 象形文字ルウィ語における子音直前に位置する *-n* は決して表記されない。
- 6) 動詞の中受動相の語尾形の一部 (cf. Hit. *-hari, -hahari, tari, -ari, -antari, -hati* 等) を形成しているとも思考することも可能であるが、印欧アナトリア諸語の比較言語学的な音韻対応の見地から語尾形 **-hasi* の形成は説明不可能である。
- 7) 象形文字ルウィ語の *-ti* 要素は、2 人称/3 人称単数の再帰小辞として確証されるのみで、現在のところ、他の人称の再帰表現には在証されていない: Melchert (1988:42) 参照。
- 8) パラー語については、Carruba (1970) 参照のこと。
- 9) (*vi-vii*) の *-enta* は文小辞、*ni-ip-pa-si* の *-pa-* は文導入辞。
- 10) 動詞形 *HWI-WHI-sa-* については、ルウィ語動詞 *huiya-* 「走る、進む」の重複語幹動詞 *hu(i)hu(i)ya-*、*-sa-* は反復相接尾辞 (cf. ヒッタイト語 *-sk-*) : Oshiro (1993:53-54)。
- 11) Hawkins (forthcoming) 参照。
- 12) 文頭 *PRAE-pa-wa/i-mu* の *PRAE-pa* は **PRAE-(a)n-pa* (表記: *PRAE-na-pa*) の子音 *-n* の脱落形 (cf. 用例 (5) *xvii:PRAE-na(*paran)*)。
- 13) Tekoğlu/Lemaire (2000) 参照。
- 14) 上掲論文: pp. 978-984。
- 15) 象形文字ルウィ語碑文には書記の記述上の誤謬が散見される。たとえば、Hawkins (2000) による誤謬の指摘総計 46 例の内訳: 文字付加の誤謬 4 例、語中・語末の音節文字の脱落 17 例、文中の語彙自体の脱落 5 例、表意文字マーカーの脱落 16 例、文字表記ミス (母音 *-a* と *-i* の混同) 4 例。特に、動詞語尾の表記誤謬としては、KARKAMIŠ (A6) 9 : *MALLEUS-la<-i>* (3 人称単数現在形語尾 *-i* の脱落) ; KAYSERI 4 : *ā-ta<-tu>-u* (3 人称単数命令形語尾 *-tu* の脱落) ; BULGARMADEN 5 : *PES-wa/i-i<-tu>* (3 人称単数命令形語尾 *-tu* の脱落) 等: 詳細は拙稿「象形文字ルウィ語の碑文書記による表記の誤謬について」(印刷中) 参照。
- 16) 楔形文字ルウィ語の中受動態語尾としては、*-(t)ari* (3. sg. prs) ; *-duwari* (2. pl. prs) ; *-ntari* (3. pl. prs) ; *-(t)aru* (3. sg. imp) ; *-antaru* (3. pl. imp)、リュキア語の中受動態語尾としては、*-xani* (1. sg. prs) ; *-(t)eni* (3. sg. prs) ; *-xagā* (1. sg. prt)。
- 17) Melchert (1993) : *ilha-/ililha-* (p. 87) ; *-ti* (p. 226)。

参考文献

- Carruba, O., 1969. *Die Satzeinleitenden Partikeln in den Indogermanischen Sprachen*, Roma.
- , 1970. *Das Palaische Texte, Grammatik, Lexikon*, Wiesbaden.
- Hawkins, J.D., 2000. *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, Vol. I. Berlin.
- , forthcoming, "Yet another Hieroglyphic Luwian stele of Hamiyata from Tell Ahmar (TELL AHMAR 6)".
- Melchert, H.C. 1988. "“THORN” and “MINUS” in Hieroglyphic Luwian Orthography”, *Anatolian Studies*, 38, 29-42.
- , 1993. *Cuneiform Luvian Lexicon*, Chapel Hill.
- 大城 光正・吉田 和彦, 1990, 『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.
- Oshiro, T., 1993, "Notes on Hieroglyphic Luwian", *Orient* 29, 45-56.
- , 印刷中, 「象形文字ルウィ語の碑文書記による表記の誤謬について」
- Payne, A., 2004, *Hieroglyphic Luwian*, Wiesbaden.
- Plöchl, R., 2003, *Einführung ins Hieroglyphen-Luwische*, Dresden.
- Rieken, E., 2004, "Das Präteritum des Medio-Passivs im Hieroglyphen-Luwischen" *Historische Sprachforschung*, 117, 179-188.
- Tekoğlu, R. & Lemaire, A. 2000. "La bilingue royale louvito-phénicienne de Çineköy", *Académie des Inscriptions & Belles-Lettres, comptes rendus*, 961-1007.